

四十二 小小説拾遺三 刀自の昔語り

雪の降りしきるある夜、そこがどこだったか今では憶えていないけれども、部屋を暖め明かりともなる暖炉の前で、一人の話者が、雪が静かに降り積もるような語り口でとても幻想的な物語を語った。その物語は、ずっと昔おおよそ今のように巡礼者の語りという形になったのだが、もともと時代を知ることでもできないほどの昔から、歳をとって一家の刀自(とじ)の役目を終わった女性が、代々の夜話として、火のまわりに集まった人々に語り継いできたのだという。古い言葉の刀自は、ヨーロッパの領主の館でも東洋の百姓ひやくせい)の小さな家庭でも、所帯をとりしきる女あるじのことである。

1

そのころ巡っていたのはたいへん乾燥した地方でした、と巡礼者は語り始めた。街道のところどころに生えているのは葉のまばらな木々だけで、体の熱を冷ましてくれる十分な木陰もありません。その日はとくに陽射しが強く、疲れた足どりで歩いていました。日が落ちかかる時間になると、空腹で喉も渴き、夜気を和らげて身を横たえることのできる今

宵の宿を探しながら進みました。しばらく行くと、左手の野いばらの茂った向こうに、岩肌のあらわな崖が立ちあがっていて、その上にどうやら建物の屋根らしいものが見えます。往来する人に踏みしめられてできた小道が、崖を回りこんで裏手の方に続いているようです。気のせくわたしは、その小道に入りこんでみることにしました。

崖の横手に来ると小道は、横にしたV字形を描いて樹木の茂った斜面を登っています。その道をたどっていくと、ところどころに低い木々の生えたわりあい開けた頂上に出ました。そこは低い丘でしたが、日の落ちた西の空には層雲が日の光に照らされてえんじ色を帯びて横たわり、右手には今日歩いてきた地方がしだいに明るさを失っていく夕闇の下に広がっています。石ころだらけの小道が、崖のほうにわずかに下るように続き、突き出た岩盤の脇のくぼ地に導きます。左手の岩の壁と右手の石を重ねた背丈よりも低い塀のあいだが開いていて、数歩のところ建物がありません。基礎石の上に日干し煉瓦を積み、屋根は左側から突き出た岩につながるように石の板で葺いてあります。小さな僧堂のたぐいだと思われまます。

長い黒衣を着た女性がドアを半開きにして応対するのへ、わたしは一夜の宿を乞う。いつも巡礼者にふさわしい身なりを心がけていたので、こちらのようすを一瞥した女性は、

小柄な老人を乱暴者とは判定しなかったようです。相手と同じようにわたしも、失礼にならない程度にその人を観察しました。しわの刻まれた顔には、ものごとをよくわきまえているようですが見えます。やはりこの小堂で修行する尼僧だろう、でも、前掛けをしているところを見ると下働きを担当する人だろうか、と見当をつけました。

招き入れられたのは台所で、踏み固められた土間になっています。さし出された白湯で渴きを癒したわたしは、わずかなお金しかありませんがなにか食べるものをいただけないか、と頼みました。女性はうなずいてかまどに向かい、かけてあった鍋の残り物に山羊の乳を足して、数片の干し肉を加えました。別にもう一皿、幾種類かの野菜にわずかの干しブドウを加え、塩とオリブ油をふりかけます。固いパンを添えて出された暖かいシチューと野菜サラダは、つつましいものでしたが、この一週間でもっとも豊かな夕食で、わたしの飢えを満たすのに十分でした。お礼を言いながらこの小堂のことを訊くと、ここにはたいそう知恵深い尼僧とお世話をする自分の二人がいるだけだ、わたしたちの生活は、このあたりの村の人々が乏しい収穫の内から持つてきてくれるもので成り立っている、と言います。食事は気持ちとを和ませ、くつろいだ会話を促します。わたしは、どこからどういう地方を巡ってきたのかを話し、尼僧は、この小堂とかいわいで起きる事件——それが事件というほどのことだとして——を語りましたが、ささやかな出来事のなかに意味を認め

ようとすると姿勢がうかがわれます。会話がひとしきり済むと、その人はカップを三つ取りだし、それぞれに乾燥したなにかの葉を入れて、院長の部屋に行つていっしょにこのハーブ茶をいただきますしようとと言うと、先に立つて廊下の斜め向かいの部屋に案内しました。

2

ドアを開けると思つたよりも広い部屋です。奥の方に火を燃やしている炉があり、そのそばにやはり長い黒衣を着た女性が座っています。よく見ると、奥側はドーム状の岩穴で、そこに炉がしつらえてあるのです。床は廊下と同じ泥岩の敷石で敷かれています。奥側は敷石の置き方が乱雑でところどころ岩肌が見え、床を平らにする漆喰が意味のない模様を描いています。炉は自然石で組まれていて、表面は幾度となく漆を塗つたように黒く、人がここで火を焚いたのはよほど昔からのことだと思われれます。炉の上の天井を見上げるとそこも黒くすすけています。岩のドームの部分だけでも二十人ぐらいは入れるでしょう。炉のまわりにわらを編んだ古い敷物が広げてあり、尼僧院長は、敷物の上に置いた大きな厚いクッションの上で、炉に対して横向きに腰をおろして書物を手にしています。

新来の者のあいさつを待たずに、尼僧院長はこちらを向いてわたしをまっすぐに見て、

「ようこそおいでになりました。ここにはたまにしか客人が訪れることがありますから、お客様は大歓迎です。もつともそまつな食事しか出せませんが、あなたのような巡礼ならそれもお許しくださいさるでしょう。遠くからの旅人はめずらしいお話を聞かせてくださいます。わたしたち二人はそういう話を聞くのを楽しみにしています」、と声をあげました。わたしは、丁寧な応対をうれしく思い、一夜の宿りを許してもらったお礼を言つて、頭を下げました。こちらの尼僧の顔にも深いしわがあり、もう一人よりかなり年長に見えます。どちらかという和小柄のしっかりした体つきで、黒い眸が人を見抜くような力を秘めていると感じました。あいさつが終わると、案内した尼僧が炉にかけてあったヤカンからカップに湯を注ぎます。院長はカップを受け取り、わたしたち二人が院長と向かい合うように炉の前に腰を下ろすのを待つて、わたしにも飲むように勧めました。三人が心地よい風味のハーブ茶を口に含んで、その場をおだやかな雰囲気が満たす。

部屋を見渡すと、炎の照らした僧院長の姿が大きな影をつくつて、天井と左手の壁に広がっています。そちら側の壁の荒い布で覆われているところは、入つてくるときに見えた窓のようです。そこには使い古された机と机とありますが、脇には書棚があつて書物でほぼ埋まっています。どういう書物があるのだろうかと思つて机と書棚を見てみると、

「昼間はそこで書物を開くことができますが、夜はこうして腰を下ろし、炉の明かりを頼りに書物を手にとります。でも、目が疲れるので長くは読んでおられません。そのときは本を閉じて、炎を見ながら瞑想するのです」、と院長の声。

窓の反対側は壁でしきられていて、テーブルや戸棚に生活の用具などが置いてあります。小さなベッドも見えます。するとまた声がして、

「わたしたちは書物だけ読んで修道しているではありません。天気の良い日には外に出て、小さな畑で野菜を育て、ハーブや薬草も採集に行きます。オリーブの実なども拾います。雨が降ったり風が強すぎたりすれば、ここでわたしたちは、山羊の毛で糸を紡ぎ、布を織るのです。山羊を数頭飼っていて、乳をしぼりチーズもつくります、たいへんな山羊の世話はこの人がおもにしてくれるのですけれど。薬草は乾燥して、調合もして薬をつくります。パンは、村の人たちから小麦をいただき、粉にひいて焼くのです。つくった薬を分けてあげるなどしますが、生きるのに必要なものはほとんどみな村人からいただくのですから、もちろん、わたしたち二人は人々のお布施で暮らしているのです」。

僧院長は、こちらの考えることを推し量ることができるよう声あげます。言われたとおり、ドア側の壁ぎわに簡易な機織り機と糸紡ぎの道具があるのに気づくと、

「ええ、糸紡ぎと機織りは時間のかかる仕事ですが、人間にとつてすばらしい作業ですよ。

時間をかけてなにかが出来上がると喜びがわきます。そのあいだいろいろなことを考えていて、あるいは、まったくにも考えていないような状態になります。昔、大したものを発明した人がいたのですね」、とはずむ答えが返ってきます。

院長の言葉でこの日常を想像して、この二人だけの修道院はほんとうに大したところなのかもしれない、という気がしてきました。

そのうち、院長の方から問いを発してわたしが話すように促し、会話が進みます。

「どちらからおいでになりましたか」

「たいへん遠い日の昇る国から来ました」

「ああ、日の昇る国！」と応じて、「そちらの方へは一族の者が行ったはずですよ」、と頬を笑みます。わたしが意外そうな顔をしたのでしよう。

「ええそうですよ。西の地の果てへも、南へも縁者が行ったし、北の極寒の国へも達したと思います」、間をおいてさらに、

「あなたの言う日の昇る国よりもっと東をどう言えばよいのか知りませんが、そちらの国々にも子孫がいるにちがいありません」

院長はいたずらっぽい微笑を浮かべています。わたしはあつけにとられて、となりに座つ

ている尼僧を見ました。彼女は、動じたようすもなく、こちらを見てうなずくばかり。

この応答をどう理解すればよいのだろうと考えていると、おもむろに次の問い、

「何か月もかかってここまで来られたのでしょうか、道中どんなことがありましたか、わたしどものためになるお話があればお聞かせください」

訊かれてわたしは、出会ったいろいろめずらしい体験を語りました。なかでも、ひと月前に目にした光景が強く印象に残っていたので、くわしく話しました。

「今年はどこでも雨が多かったです。ここまでひと月の行程の地方を通りかかった時分、ちょうど大雨が七日続き、その地方を流れている大河が決壊して洪水になりました。わたしは運よく土地の高い村にいたので命拾いしましたが、低地の村々は濁流に襲われて、多くの家々が壊され、たくさんの老若男女が流されました。水が引いたあとそちらを歩いてみたのですが、通りかかる村のどこでも、壊された家をぼうぜんと見つめる人、家族を失うづくまっつて泣いている人たちがいます。巡礼にできることは、悲惨きわまりないそれらを一つひとつ数えるように目に刻みながら、道を進むことだけでした……」

言葉をひきとって院長がぼつりぼつりと言います。

「あなたの見た光景がわたしの古傷をうずかせます。幾たびそういう苦しみをなめたこと

でしょう。わたしたちはそのように生きて世代を重ねるのです。多くの人を失った村が以前のようになるのには何年もかかりません。そのあいだ、生き残った人々は、悲しみを胸にいだいて、明日を、明後日をつくっていつて、なんとか前のような生活にもどることができのです。……子をなくした母親の気持ちはどれほどつらいことでしょう」

「同じ悲しみをあなたは味わったのですね」

「ええ、幾たびも……」

記憶をたどるかのように沈黙し、だいぶしてから横に置いた書物を指さしながら、調子を变えた口調で言います。

「これはある賢者の言葉を弟子たちが拾い集めた書物ですが、今になってわたしの心に響きます。子を失った母親が救いを求めて訪ねてきたとき、その賢者はただ言ったそうです。——この村の家々を訪ねて廻り、芥子の実を集めなさい。ただし、子を亡くしたことがなく、父母兄弟姉妹の弔いも出したことのない家だけから——と。たいへんつらい言い方ですね。でも、わたしたちは、この言葉をかみしめて、生きるとはどういうことかを学ばなければなりません。人生とは何か考えながら苦勞を生きるほかはないと思います……」。こちらを見て言葉を足しました、

「わたしは、古い時代の賢者たちの知恵を言い伝えているだけですけれど……。洪水に襲

われた村々の人々が立派に生きていくだろうことを信じます。あなたの見たことはあなたの心にとどまり、聞いたわたしたち修道者も心を新たにしますので……」

この人の言葉はなにかしら余分なものを含んでいる、と思いつながら聞き入りました。

会話がとぎれて、もう一人の尼僧が、自分の部屋にもどりますと言つて立ち上がると、院長は、お客様とわたしにもう一杯ハーブ茶をください、二人でもう少しお話ししましょう、とお願いしました。

カップが持つてこられました。わたしたち二人は、お茶をすすり、炉の炎がゆらめくのを見つめます。岩穴になったここでは、構造物がつくられるよりもはるか昔から、人がこの炉で火を焚いて、わたしたちのように言葉を交わして夜を過ごしたのではないか、と想像されます。

「そうです。わたしたちの家族は、雨や風を避けてこの岩穴に入り、肩を寄せ合つてうずくまって眠つたのです」

予想を超える言葉を発して尼僧は、炎を見つめ、その上のすすけた岩の天井を見上げて、「あなたは、わたしの言うことをいぶかしく思うでしょう。でも、わたしは、たしかにこ

のあたりで一つの生を送ったと思います。じつにさまざまがありました。……わたしは夢を見てこういうことを話しているのではありません。目覚めているわたしの頭が、そういうことがあったと教えるのです……。話せばきつと長い話になるでしょう。けれども、語ってみたいと思います。お聞きになりますか」

不思議な話しぶりをほんとうに変だと考えながら、わたしは老いた尼僧の黒い眸をただ覗きこむ。

そして尼僧院長は、大文字の尼僧でもあるかのように昔語りを語り始めました。

3

わたしのことを尼僧だなどと考えずに、あなたに想像もできないくらい昔、言ったそばからむつかしい注文をしますが、一人の少女がいたところを想像してください。

わたしには姉と兄がありました。兄とわたしの二人は、ほかの人たちと違っていました。ほかの人たちがみなそう言うので、いつしか自分たちに変わったところがあることに気づきました。どういうわけか、兄とはよく心が通じあうのです。兄もわたしも、姉とはそれ

ほど分かりあえないのをもどかしく感じました。もう一人、わたしたち二人と気持ちを通う人がありました。それは、あたりまえのように聞こえるでしょうけれど、母です。母と兄とわたしの三人だけのときには、話がとてもはずむのです。ところがそれは、そのころの大家族ではあたりまえのことではなかったのです。ほかの人たちが言うには、変なのはわたしたち三人でした。そのころの大家族では、同じ世代はみな兄弟姉妹として育ったのですが、母の口ぶりでは、母の生んだ子の何人かは幼児のころ死んだよう、姉と兄とわたしの三人以外は叔母たちの子どもたちです。そんなことをはっきり意識していたのは、母と兄とわたしだけだったと思います。

あとで考えてみると、わたしたちの母親が特別の存在だったのだと思われれます。あなたにわたしを大文字の尼僧と思いなしたようですが、同じ言葉づかいをすれば、母こそ大文字の刀自になるべき人だったでしょう。しかし、わたしがまだ幼いころ亡くなりました。たぶん父はそれ以前に死んだのだと思います。大人たちが母を葬ったとき、兄とわたしの二人は、遠くまで出かけて、できるかぎりきれいな花を集めて持ち帰り、母に捧げました。遺骸になにかを置く例は無かったことではないのですが、わたしたちのやりようがちがついて、大人たちはその後にも変わっているとうわさしたものです。伯母たちは、わたしが大粒の涙をためていつまでもなにか言葉を発して泣くのに驚きました。というのも、わた

私たちの大家族はまだ、言葉というものをもっていなかったのです。そのときのわたしの叫びが「母」という言葉になったということを、あなたに信じてもらえるでしょうか。

そうです。ずっとずっと昔の物語なのです。わたしたちは、一、二時間で歩いて行ける範囲にある食べ物を探します。時には、ずいぶん遠くへ出かけました。どこにどういふ食べ物があるか知っていたように思います。動物を狩るときは総出のことが多かったですね。おなかをすかせながらも、どうにかやっています。わたしたちの祖母が亡くなると、母の姉が刀自になって、大家族の所帯をとりしきりました。ほかの大家族と食べ物のある土地をめぐる争うときは、狩りのときに活躍する大男の伯父が頼りでした。でもこういう理解は、尼僧になってから聞いた話のせいかもしれません。

（話の途中で、話者がだれなのか混乱することがありますが、そのままにします）

あるとき兄とわたしは、そこから見える景色が気に入っている場所に座っていました。この岩穴の近くだったかもしれない。目の前の地面に小さな木が生え出ています。二人ともそれが気になって、「なんだろう？」というような話をしたと思います。それは記憶の底に残っていたのでしょう。次の年また、そうとは意識せずにはわたしたちはその場所にもどって景色をながめているうちに、二人とも、そこに去年見た木が小さいながらも自分

が何ものかを主張するように成長しているのに気づきました。すると兄が目を輝かせて、「これは前に見た木だ」と言うのと、ほんの少し考えるそぶりを見せたあと叫びました、「うんそうだ、いつだったか、たしか二人はここで木の実を食べたじゃないか」。そして、喜びの声が続きました。「ぼくたちは、その木の実を食べて中の芯をそこに吐き捨てた、その芯がこの木になったのだ。この木はまだ小さいけど、ぼくたち家族がいつも食べる実をならせる木だよ……。そうだ、あの実の芯は、あの木に成長するのだ!」。わたしもすぐに兄の言おうとしていることが分かりました。

わたしたちは、ナツメヤシと種という言葉をとりました。その言葉は、種を地面に植えて育てれば、何年かすればナツメヤシの実を食べられる、ということを意味しているのです。その年さっそく、その木がどういうところにあるかを観察し、よく似た場所を岩穴の近くに探して、種をいくつも植えました。伯母や大人たちにそのことを説明したのですが、半信半疑のようでした。でも二年目に、種から成長した木がたしかにナツメヤシだということ、大人たちも認めました。こうして、ナツメヤシを栽培することが始まったのです。わたしたちの大家族はやがて、前ほど食べ物に困らなくなりました。それからはしだいに、食べられる木や草を植えて成果を試すようになったのです。

そのうち、青年に達した兄は別の大家族の婿養子になりました。今の婿養子とは違いますよ。そのころの結婚の仕方はそういうものだったのです。同じころ、わたしも夫をもちました。乱暴者でなかなか御しがたいと思いましたが、男はたいいそうしたものです。まあ、ましなほうだったでしょう。まもなく生まれた女の子をかわいがってくれました。ほかの人よりもなにかと工夫をして役に立つことを始めるものですから、刀自である伯母もわたしを頼りにし、なにかあるとこちらを見て助言を求めたものです。大きくなった家族の中で、年長の男も女も若いわたしに一目置いていました。ですから、夫もわたしをぞんざいには扱えません。わたしはほどほどに幸せでした。

娘とわたしの仲はほかのだれもが不思議に思っていました。わたしたちは、笑ったり怒ったりしながら声を交わすのです。それを見ている伯母たちにはどうしてそれがうれしいのか分からないようでした。父親である夫も理解できませんでした。だって、わたしたち二人は、もっと気持ちを通いあわせようとする新たなゲームを始めていたのです。ええ、思い浮かんだことを表わす符丁をとり決めながら、それまでだれもしたことのない母と子の会話を楽しんでいたのです。ときには冗談さえ交わして喜びました。小さいときのことだ記憶に残っていないのかもしれませんが、わたしと母とのあいだでもこんなに意志が通じたことはなかったように思います。

それから、今度は男の子をさずかりました。今のように男の子が家を継ぐというような習慣や男を尊重する考え方はなかったのですから、わたしは、男の子も女の子も区別なくかわいく思いました。とにかく、赤子を育てるときには、母親というものはほとんどそのことにかかりきりですよ。上の娘は少しすねましたが、弟に乱暴なことはせず大切にしました。わたしは幸せでした。しかし、わたしの子孫の賢人たちが言ったように、地上に生きる者には安楽だけがあるわけではありません。人生は、一尼僧であるわたしはあまり悲観的に表現してはいけないと思いますが、苦難とそれへの対応、そしてときどきの喜びからできています。

下の子が走れるようになってだいぶ経ったころ、姉やいとこたちと河原で遊んでいて大けがをしました。岩に倒れこんで胸を強く打ったのです。家に運びこまれたときには、内出血で胸が紫色です。わたしは必死で看病しました、そのころ効くと信じられていた薬草を胸全体に貼って。娘もいっしょに、三日三晩寝ずに看病しました。でも息子は、三日目の夜遅くには動かなくなりました。翌朝みんながようすを見に来るのを近づけず、四日目も、母娘でかわいいそうな息子のそばでまんじりともせず夜を明かしたのです。先ほどわたしは子を亡くした母親の嘆きを話したでしょうか…。

（わたしの前には、大文字の尼僧が宙を見つめながら座っています）

五日目にととう、家族のものがみんなでわたしたち親娘をせきたてて、息子の葬送をしきたりに従って執り行ないました。そのころのしきたりがどういうものだったかは思い出せません。わたしは結局、そのしきたりとちがうやり方をしたのです。娘とわたしは、大きな日陰をつくる姿のよい木の下に、爪をたてて地面を掘って穴をつくり、そこに息子の亡骸をおさめて土をかけました。それから河原から大きな石を運んで、盛り上げた土の上に。そして、わたしの母が亡くなったあとと兄といっしょに花を摘んできて置いたのを思い出しながら、娘と二人で花を探しに行きました。花の季節ではなかったのですが、なんとか一枝の草花を見つけ、それに香りのある実をつけた木の枝を添えて石のそばに並べました。あなた方も、人が亡くなるとそのように墓をつくりますね。

わたしは悲嘆のあまりどうかしていました。食事にもあまり手を出さない。娘が心配して食べ物やさしだすので、その目をうつろに見ながらようやく食べるような状態でした。でも、でも、人はおながすけば何かを食べて生きていくようにできています。わたしは、死とはなにか考えているつもりでした。しかし、尼僧になつて修道していてもそれを知らないのですから、ただ、大切な人が死んでもどうしようもないことを教えられながら、悲

しみが少しづつ引いていくのを待っていたにすぎません。その後わたしは、息子の死んだ河原に近づかないようになりましたが、母親にはそんなことしかできないのです。そのあとも子をさずかったのに、八日目に死にました。また似たような状態になり、進歩があったとは言えないでしょう。姉妹たちが子を失うのも見ました。そうしてただ、人は死ぬのだということを知っただけです。それに耐えて受け入れるようにという賢者の勧めを、今ごろようやく、尼僧のわたしは学びつつあります。

二人の子をたて続けに亡くして動揺したわたしはおかしかったのでしよう。そのありさまがほかの母親とはちがうものに見えたようです。刀自の伯母はわたしに注意してくれましたが、たいいていの人はとがめるような目でこちらを見ました。夫も、わたしのふるまいにいら立ち、あきれ果てたのかとうとういなくなってしまうました。二度目の夫を迎えたのはだいぶ経ってからです。そのころにはわたしも落ち着きをとりもどしていました。今度の夫はおとなしい人で、わたしも歳相応にふるまえるようになっていました。また子をさずかり二人が育ちあがりしましたが、どういいうわけか、二人のうちの下の子とはうまく会話がはずみませんでした。もつとも、上の二人の子としていたのを会話と呼ぶとしても、わたしが今あなたとこうして話を交わしているようなものではなかったことに注意して

ください。なにしろ、わたしが子どもたちと話したとき使った言葉の数は、数え挙げても、最初のころは数枚の紙に書ける程度だったのです。

（奇妙に感じて尼僧を見ると、老女は笑いながら、そのまま話を続けました）

二つ三つの声で表現しようとしていることを、相手が違う意味にとることが起きるので、ちんぷんかんぷんなこともしばしばです。でも、ちがう言葉を話す人のあいだでも、身振り手振りで意思は通じますね。考えてみると、符丁の組み立て方、むつかしく言えば記号の構造が、文をつくりだして、意味を表現することになるのでしょうか。不思議なことに、人間の頭は、そういうことができるように巧妙にできていると思われれます。わたしたち親子は、親族のほかの者とちがって、身を入れてそういう遊びをすることができた、と今にして思い当ります。ですから、ちぐはぐが起きても、回数を重ねるうちに、ある身振りに当たる声を聞き分けるようになり、だんだん共通の発音ができていきます。そして、それらを順に声に出す並べ方にも慣例が生まれていきました。つまり、わたしたち親子三人は、毎日、言葉をつくる作業にいそしんでいたことになりました。つらいことに、一番下の子はこの作業にうまく参加できませんでした、わたしは、悲しくていらだつこともありました、が、未っ子のその子を一番かわいがったと思います。

書きつけるのに数枚の紙があれば足りる最初の言葉はそうやって、わたしたち親子三人

の始めたゲームのようなことから出来上がっていったのです。年月が経つうちに、必要な紙の―賢明なあなたはそのころ紙などなかったことをご存知ですが―数はしだいに増えました。それがついには辞書に至るなどと、わたしには考えも及びませんでした。わたしがたいそうな話をしているとお考えになりますか？。でも、あなたの使う「母」という言葉を発明したのはたしかにこのわたしなのです。言葉を書きつける文字を発明した人間たちは、わたしの数千代もあとの子孫なのですから、これは、気の遠くなるほど昔の話なのです。

4

人は歳をとりますね、あたりまえのことですが。僧院に暮らす尼僧でも、自分の顔が変わっていくのが気になります。そのころ鏡はなかったのですから、そんなことを気にしていたかどうかよく分かりません。ただ、自分の子が大きくなり連れ合いが歳をとるのを見、また伯母たちが老けていくのを見て、自分が歳をとっていくことをなんとなく受けとめるわけです。修道しているわたしでも、年齢を重ねて体も心も変化しているということだけをわきまえているかと反省してみれば、心もとないですね。ずっとずっと昔のわたし

は、そんなことを考えもせず日を送っていたのだと思います。あなたはどちらの生き方に軍配を上げますか。

まだそんなことに惑っているので、話が脇道にそれてしまいました。言いたかったのは、わたしたち大家族の世代がじよじよに交代していったということです。伯母が歳をとって衰えると、わたしが一家の所帯をとりしきる刀自を継ぐことになりました。みんなからわたしは変わり者と見られていたのですが、なにかをするときにわたしがどういことを言ひ出すか期待する者が多かったですし、家族の生活を改善するのに役立つ工夫を一番考えついたのでわたしたち親子だったので、そういうことになったのです。

その前のことだったと思います、長女が成人して夫を迎えました。わたしの兄が婿入りした大家族の青年でしたが、その娘婿と話をするうちに、彼が兄の子だと分かりました。だって、うれしいことに彼と会話ができたのです。そう分かってから、面立ちに兄と似たところがあることに気づきました。長女と甥は、大家族の中で際立つ夫婦でした。二人の会話はすばらしいものでした。相談し力を合わせてつきつきに新しいことを試みました。新しい言葉が生まれるのが早くなりました。書きつけければ冊子と呼べるほどになっていきます。ほかの者は、びつくりしながら二人のようすを眺め、なにかに成功すると、自分たちもその利益にあずかることができて感心したものです。誉めてばかりいてはいけません

ね。ナツメヤシを育ててその実を食べる者は悪を知るので。リンゴを食べた者とはかぎりません。夫婦喧嘩をしました。言葉で言い争うので、ほかの夫婦よりも激しかったですね。あなたも、身に覚えがありそうですね。わたしはどうだったかですって？、それは言わないことにおきましよう。

あるとき、婿は人工的に火をおこす道具を発明しました。火を制御できるというのはほんとうに大したことですよ。肉を焼いて食べてなんとおいしかったことでしょう。娘たちは、その前から、泥をこねてくぼみのある形にし、それを乾かして器をつくることをしていました。それを火で焼いて硬くて丈夫な土器ができました。それに水などを蓄えることができず。水を入れて火にかければ湯にすることができ、食べ物を温めることもできます。むしろ、泥の器でそうしようとして焼き物ができたと言うべきでしょうか。こうして調理することが始まったのです。かまどを管理する者となって、わたしは正真正銘の刀自になりました。今わたしは「刀自」を国際語で表現して語っていますが、それにあたる言葉がつけられて一家の主婦がそう呼ばれるようになったのはわたしが最初なのです。だから、あなたは、わたしのことを大文字の刀自とお考えになってさしつかえありません。火を燃やしていたかまどはここです。天井と壁に映るわたしの影がそう見えませんか。

家族の中で際立っていたわたしは親子に彼が加わって、わたしたちの集団はいっそう進歩しました。文明の興隆と言ってみたいけれど、おおげさでしょうね。この僧院のつましい生活にくらべても、まだまだ雲泥の差がありました。尼僧院長のわたしに言わせれば、進歩はじつにのろのろしたものでした。わたしは、こちらは刀自の方ですが、その進歩がよく分かっていたのではありません。だれにしても、自分がその中で暮らす社会の大局的な推移を意識して把握するのはむづかしいものです。でも、言葉で意思を理解しあうことが特別の関係を築くのだということをするうすうす自覚するようになりました。それは、わたしのリーダーシップを強める働きをしました。賢い娘二人と娘婿をもつわたしは、大家族の中で、狩りや力のいる仕事で頼りになる男たちのリーダーよりも強い立場に立ったのです。

農作物の栽培を始め、火で調理してそれまで食べられなかったものまで食べるようになってきたわたしたちの大家族は、工夫を重ねて生活の仕方も向上したので、人数が増えていききました。最初の人口増加ということが始まったのです。人間の数が多すぎるとその集団をとりしきるのがむづかしくなります。やがてわたしたちの集団は、かまどを別にする二つの大家族で構成されるようになりました。二つの大家族はまだつながりが深いものでした

が、別々に食べて眠ればわずかながらでも互いに異なる習慣ができます。将来村になる暮らし方が模索されていたのです。

大家族の一つは、わたしが刀自で、血縁的にわたしに近い者たちとその連れ合い、そして子どもたちの大家族です。わたしはこの岩穴に住んでいたと思います。ここに入りきれない夫婦は、丘の斜面に穴を掘って入り口に草を編んでつくったむしろをつるし、そこで眠りました。この辺での住居のつくり方はそのやり方になりました。でも、衣食住のことを話すとつきりがありませんし、一夜の昔語りでは語りつくせないので省略しましょう。

5

おやおや、話に夢中になって、夜も更けたことに気づきませんでした。ぼつぼつ終わらなければいけませんね。ほんとうは、長女と甥の夫婦に男の子と女の子が生まれた話もするつもりでした。この家族はすばらしい見ものでした。わたしは、あなたもお分りになるように、わたしのあと刀自になった長女でもあるのですから、その尽きない話もするつもりだったので。しかし、時間が来てしまいました。

(たいへん悔やまれるのですが、尼僧の夜話は急に中断されて終局となりました)

さて、修道する身なのに、この炉の前でうとうとしてこんな夢想到にひたっているのです。わたしは女性ですから、ずつとずつと昔の母親であり刀自だった女性は、この炉で火を焚きながらどんなことを思っていたのだろう、と考えるのです。あなたは、愚かなこととお考えですか、それとも、少しその気分を分かっていただけでしたか？。

わたしは、こんな夢想もまったく修道にならないわけではないだろうと思います。この炉の火を見つめながら、人間が生きる意味はなにかを問い続けています。わたしは、夜ごとゆらめく炎になって、母親であったわたし、刀自であったわたし、ずつとずつと生きてきた女性たち、人間たちの、人生を生きなおしてみるので……。尼僧のわたしは、いったい、太古の刀自よりも進歩したところがあるだろうか、と自問するのです。しかし、そうだと答えるのはむづかしい……

*

*

*

話者は、この昔語りの語り手は次のように話を締めくくることが決まりだったと言って、語りを終えた。

——天井と壁に語り手と聞き手の影が二つ映っていますね、それは今のわたしとあなた
なのでしょいか、それとも、ずっとずっと昔の尼僧院長と巡礼、あるいは太古の刀自と
その孫でしょいか——